九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本最初の修学旅行の記録について ： 平澤金之助「六州游記」の紹介

新谷, 恭明
九州大学大学院人間環境学研究院教育社会計画学講座 ： 教授 ： 教育社会史

https://doi.org/10.15017/988

出版情報：大学院教育学研究紀要. 4, pp.37-61, 2002-03-25. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学大学院教育学研究紀要，2001，第4号（通巻第47集），37－61
Res. Bull. Education., Kyushu U., 2001, Vol.4, 37－61

日本最初の修学旅行の記録について

――平澤金之助「六州游記」の紹介――

新　谷　恭　明

0　はじめに

修学旅行は現在においても学校教育の中で重要な存在であるようだ。日本における修学旅行の嚆矢についてはすでに言及してきたし，草創期の福岡県尋常師範学校が実施した修学旅行の記録についても紹介してきた(1)。修学旅行が師範教育においてどういう位置づけにあったかということについては前著論文を参照してもらいたい。その際に触れたことであるが，日本における修学旅行は森有礼文相の師範教育改革に軍隊的な要素が導入されてくることに抵抗した高嶺秀夫東京師範学校長が行軍旅行に学術研究の要素を採り入れて修学旅行と称するようになったということであった(2)。計画段階から修学旅行という名目で計画されたのは東京文理科大学・東京高等師範学校『創立六十年』の記述に従えば明治20年３月に定められた構想であった。それによると以下の４種類が想定されていた。

第一　七月十六日より九月十日までの中　　三十日以上
第二　十二月二十日より同三十日までの中　｝時宜により執行
第三　三月十五日より同三十日までの中　｝時宜により執行
第四　毎月一回　　土曜日　一泊以下

第二，第三，第四については，いずれも短期であり，これらは「兵式体操の用具を携帯せしめず」(3)学術研究が主であった。

第一のものについては一ヶ月以上という長期にわたるものであり，行軍旅行の系譜をひくものである。これが明治20年の夏に実施された日本で最初の修学旅行であった。この旅行がどのようなものであったかについては『創立六十年』に「此の規程に基づき，同年八月六日より九月四日に至るまで一箇月に亘る長途修学旅行を為さしめ，生徒をして銃を肩にし剣を帯びしめ，酷暑を犯して信甲駿相の山地を跋歩せしめた。」(4)と簡単に概要が記されているのみであり，どのように「学術上の実地観察研究を併せ行つた」(5)かは明らかになってはいない。

本稿ではこの日本で最初の修学旅行に参加した生徒の日記を翻刻・紹介することで学術研究と行軍がどのように組み合わされて実施されたのかを明らかにしたい。

1　平澤金之助の日誌について

(1) 平澤日誌について

本稿で紹介する平澤金之助『旅行日誌類』は平澤立世氏（福岡市南区在住）所蔵の史料である。この『旅行日誌類』は埼玉師範学校及び高等師範学校生徒であった平澤金之助が在学時代に参加した旅行を丹念に記録した旅行日誌のたぐいを綴じ込んだ私用の記録で，細筆書きである。表紙に『旅行日誌類　平澤』と書かれ，旅行ごとに題名，書き方にも変化がある。その内容は以下のようなものである。

日誌名及び署名		日程及び概要	
六州游紀	ひらさは	明治20年８月６日～９月４日	修学旅行日誌
獣猟紀行		明治19年２月16日～19日	獣猟運動記録
婦月のたび	奇玉散人	明治22年７月15日～８月14日	旅行日誌
婦月のたび	奇石散人		
明治二十一念中穐　会越游紀		其一及び其二	
		明治21年７月20日～８月23日	生徒旅行日誌

第一の「六州游紀」は本稿に翻刻する史料で，高等師範学校が明治20年８月に実施した日本で最初の修学旅行の記録である。

「獣猟紀行」は平澤金之助が埼玉県師範学校生徒であったときに参加した狩猟運動の記録である。「今ノ世ニ体育ノ必用ナルハ今改メテ喋々スヘキニ非レトモ」というように体育の必要性を訴え，「千百ノ学生ハ動ヤモスレバ其攻撃ヲ蒙ムリ仮令幸ヒニシテ命ヲ敵鋒ニ隕サヾルモ十中ノ七八ハ概ネ負傷者タルモノヽ如シ此ノ如クニシテ能ク其身心ノ健全ヲ保シ能ク其成功ヲ全フスルモノハ寥々トシテ暁天ノ星ノ如シ豈口惜シコトノ至リナラスヤ之ヲ防クノ方法果シテ如何ス可キヤ是特ニ体育ヲ盛ンニシテ学生ノ体力ヲ増進スルノ外他ニ良策アラサル可シ是我文部省ガ曩ニ体操科ノ設ケアルニモ拘ハラズ更ニ兵式操練ノ一科ヲ以テ学科ニ編セラレタル所以ニシテ爾来各府県ノ学校ニテハ盛ンニ之ヲ実施セラレタルガトキニモ我埼玉県師範学校ノ如キハ其規模最完美シタルノミナラズ節々ハ又遠足運動ヲモ行ヒ生徒カ活溌ナル体力ト勇壮ナル志操トヲ鼓舞センコトヲ試ミラレタルコトモ亦数多回ナリシカ」と師範学校令以前の地方師範学校における兵式体操の振興の一環として位置づけられたもので「生徒獣猟運動ノ如キハ其最モ盛ニナルコト未タ曽テ其例ヲ見サル所」という旅行の記録である。

「婦月のたび」は明治21年のものと22年のものとが納められている。タイトルは文字通り七月の旅行記録という意味であり，毎年この月に実施される修学旅行の記録になっていると考えてよいだろう。明治21年のものは「婦月のたび」と記された表紙はついているものの「明治二十一念中穐　会越游紀」というタイトルを持っており，おそらく明治22年の「婦月のたび」をまとめたときに遡って表紙を冠したものではないかと思われる。しかし，明治21年の「会越游紀」は明治二十一年自七月二十日至八

月二十三日高等師範学校生徒旅行日誌と暴騰に記され，緒言には「本回の旅行には理化学科担任の諸教官は何れも用事ありて赴かず去れば該科の生徒も旅行中識見を得る共便なきにより只有志の輩のみ同行すべき事となりければ該科の生徒は大いに望みを失す也」とあり，高等師範学校の教師にとって第一の職務ではなかったことが興味深い。さらに続けて「或るは避暑の為め地方を歴遊するあり或るは故郷に帰る者などありて修学旅行の一行に加ハりたるは只一人のみなりきされば爾余の生徒にては博物学科文学科及少数の中学師範学科生あるのみされ共相伴なふ教官は多くは博物学科担任の人なれば今回の是を博物科生徒の旅行とも言フべき様なり」と博物科以外の生徒もこの旅行を理由を付けてサボタージュしていたことがわかる。

こうしたことを考え合わせれば高等師範学校で始められた修学旅行は必ずしも強制力を持っていたわけではなかったことが想像されるが，その点の分析は後の機会に譲ろうと思う。今回は紙数の関係から「六州游紀」のみの翻刻を行い，他の日誌についても別に翻刻の機会を持ちたいしその際に今回できなかった分析もできるだろうと思う。

(2) 平澤金之助について

この旅行の記録者であった平澤金之助という人物は高等師範学校を卒業後，主として中学校の教員，校長を歴任した人物である。慶応３年に埼玉県菖蒲町に生まれ(6)，明治６年に埼玉県公立菖蒲学校に入学し，ここで上等小学科第一級まで終えると明治12年４月に東京日本橋区田所町私立最上学社で数学を学んだと履歴に残している。明治17年４月に埼玉県師範学校に入学している。そして19年７月に高等師範学科を卒業した(7)。卒業前に師範学校令が出ており，師範教育政策の転換点を体験していることになる(５)。

埼玉師範学校を卒業すると平澤金之助は埼玉県入間郡の越辺川小学校小学校に五等訓導として就職する。そして翌20年１月には同校の校長兼訓導に昇任している（月俸12円）のだが，その年の４月に現職の身分のまま「埼玉県ノ推薦ニヨリ東京高等師範学校ニ入学」することになった。履歴書によれば「明治二十一年十二月依願小学校教職被免」とあり，一年半ばかり高等師範学校生徒でありながら「校長兼訓導」の身分を保持していたことになる。

ところで，高等師範学校は理化学科，博物学科，文学科の三科を擁していたが，最初の年（明治19年）は理化学科のみ募集し23名が入学している。翌20年には博物学科のみ募集し，21年は文学科のみの募集をした。三学科同時に募集するようになったのは明治25年度からであり，平澤金之助は博物学科の第一期生であったということになる。同期に入学したのは15名であった(8)。

卒業後の平澤金之助はまず母校である埼玉県尋常師範学校教諭兼訓導として奉職した。月俸は38円，小学校長時代の３倍以上になった。そして一年後の24年鹿児島県尋常師範学校教諭に転勤となる。そして明治26年12月に宮崎県尋常中学校教諭として転出し，中学校教員としての職歴が始まる。明治30年香川県（高松）尋常中学校教諭を経て同33年には大分県臼杵中学校長兼大分県臼杵中学校教諭と校長職に就く。33歳であったが，年俸840円（月70円）を得ている。以下明治35年兵庫県立柏原中学校長，同38年兵庫県立姫路中学校長，大正３年兵庫県立第二神戸中学校長同６年兵庫県立第一神戸中学

校長，同10年には京都府立桃山中学校長となって公立学校長としての職歴を全うした。退職後は上京し，昭和２年に私立成美高等女学校の嘱託などを勤め，その後昭和14年まで全国私立中等学校恩給財団主事の職に就いていた。昭和17年９月13日老衰のため死去している(9)。

2　平澤金之助日誌に見る修学旅行の概要

(1) 旅程と宿泊

この記念すべき最初の修学旅行は明治20年８月６日に稿が起こされている。この日早朝３時半に起床し，４時半に学校を出発した。おそらく学校から上野駅までは徒歩で移動し，６時発の列車に乗って北上した。11時15分に横川駅に到着し，ここから徒歩でしばらく移動して坂本宿に達したのがほぼ正午ころである。ここで藤橋新次郎なる家に投宿する。そしてここで一泊し，翌７日の朝は４時起床，５時に宿を出た。新道が二，三日前からの雨でぬかるんでいるため旧道を歩いて碓氷峠を登り，碓氷町で休憩した後軽井沢を経て10時半に沓掛に到着した。このように早朝に出立し，午前中に次の宿場に着くというのが基本的な移動パターンであった。おそらく早朝の涼しいうちに移動を終えてしまおうということなのだろう。

以降の行程は表１のようになる。

８月８日は浅間山登山という大きな課題があった。沓掛を出るに際し，案内人を４，５人雇い入れ，麦湯を担がせたというからかなりハードな行程であった。頂上近くになると「百歩毎ニ一休スベシト乃チ歩ヲ始ム二三休ノ後ハ百歩ノ苦痛ニ堪ユル能ハズ六七十歩ニ一休シ十時三十分ヨリ十一時頃迄ニ衆全ク頂上ニ達ス寒甚シ衆皆外套ヲ着シテ相抱合ス」とその厳しさを書き残している。しかし，登山の常識として下りはさらに厳しかった。「下ル道路絶険登路ノ日ニアラズ粗大ナル焦石磊々地ニ布キ絶テ人跡ノ存スルヲ見ズ家フルニ傾斜ノ度一層甚タシキヲ加ハヒ行歩ノ難得テ名状ス可カラズ百余人ノ衆寂トシテ声ナク唯石塊ノ磊々耳ニ囂シキヲ聞クノミ皆能ク呼吸シ得ル者ナシ」とその険しさを語っている。さらに彼らを濃霧が襲った。周囲の見えない恐怖心のあまりに「歩々是レ死地ニ入ルガ如ク親アルモノハ之ヲ回想シテ心ニ哭シ妻子アルモノハ之ヲ追懐シテ密カニ悲シム」と動揺の様子が描かれ，難地を抜け出したときには「子孫百代ニ至ル迄誓ツテ此険ヲ踏ム可カラズト」言い合ったというから，相当につらい体験だったのであろう。さすがにこの日の到着は午後４時になっていた。

翌９日から再び通常の行軍による移動となり，17日に甲府に到着した。甲府は大きな都市でもあり，格好の社会見学の場であった。甲府を出立すると富士吉田まで下り，ここから富士登山を敢行することになる。吉田で荷物の整理をして「銃剣及背嚢等ハ直チニ須走駅ニ廻送」して身を軽くする一方で「六七人宛ニ剛力ト唱フル道案内一人ヲ雇」っている。富士登山はこの修学旅行最大のイベントであった。記録は数頁にわたり詳細に実態が記されている。

下山後はしばらく箱根に滞在してさまざまな活動をした後小田原に出，国府津から汽車で東京に戻るという行程であった。

表1

月　日	出発時間	到着時間	宿泊・到達地	備　　考
8月6日	6時	12時	坂本駅	汽車で移動　横川より行軍
7日	5時	10時30分	靴掛(沓掛)	
8日	4時30分	16時	追分駅	浅間山登山
9日	6時	10時	岩村田駅	教諭浅井大尉の演習講義
10日	5時	10時25分	望月村	千曲川河畔で演習
11日	5時	10時30分	和田駅	
12日	4時	10時	下諏訪村	餅屋村で餅を食す
13日	6時	8時	上諏訪村	浅井大尉諏訪の七不思議話
14日	5時	10時20分	金沢村	宿舎なし
15日	4時	10時	台ヶ原村	県吏及郡吏の砂糖麦湯の饗応
16日	5時	9時30分	韮崎	気象計測
17日	5時	9時	甲府	甲府見学
18日			甲府滞在	尋常師範学校昼飯の饗応
				学校巡視
19日	5時	9時	黒駒村	日蝕観察
20日	4時	9時20分	川口駅	坂路峻険
				高嶺教頭の魚獲り
21日	5時	8時20分	地村吉田	登山の用意
22日	6時	2時06分	八合目	富士神社奉祀　山上の雪隠
23日	5時	3時10分	須走リ駅	
24日	5時	3時30分	箱根駅	御殿場　長尾峠　千石原
25日			箱根滞在	休業　終日昼寝とトランプ
26日			箱根滞在	西教諭と駒ヶ嶽登山
27日			箱根滞在	岩川教諭と生物採集
				午後湖水にて遊泳
28日			箱根滞在	雨天休業
29日			箱根滞在	岩川教諭と生物採集
30日				雨天休業
31日				生物採集
1日				雨天休業
2日	5時			七湯巡廻
3日	13時	16時	小田原	
4日	4時	11時	帰校	国府津より汽車

(2) 学習・研究・視察活動

修学旅行であるから，学習・研究の要素は重要であった。まず自然観察の眼は常に日誌中にあらわれているし，時々気圧や温度，さらに地勢なども記録している。特に富士登山などのような自然観察の機会には相当に細かくそうした情報をチェックしている。たまたまこの夏には101年ぶりの皆既日蝕が観測されることになっており(10)，一行は黒駒村で日蝕に遭遇した。「此日宛カモ日蝕ニ際シ然カモ一天曇リナケレバ詳ラカニ其状ヲ観察シ得タリ」と好天に恵まれ「三時四十三分ニ至ツテ其極ニ至ル此時太陽ハ九分六七厘迄其形ヲ欠キ四山糢糊トシテ霞ヲ帯ビ日光暗淡トシテ温熱頓ニ減シ肉眼ニテ直チニ蝕ヲ窺フ可シ飛鳥塒ニ帰ラントス恒星一箇太陽ノ左方ニ現出シタリ日ニ是レ稀有ノ現象ニシテ一時ハ物凄キ有様ナリキ只憾ムラクハ皆既蝕ヲ見ル能サルヲ已ニシテ太陽ハ次第ニ其大サヲ加ヘ四時四十分全ク旧ニ復セリ」と日蝕の経過を記録している。これも自然観察の一つであろう。

箱根では岩川教諭の指導のもとに生物の採集を何度かおこなっているが，これも自然観察に属する学習活動であろう。

この日誌の特色はそれぞれの土地の風俗や産業についても随時記録していることである。例えば岩村田の場合，「ここまでで最高の土地であり，人口は5,600人，裁判郡衛警察等があり，印刷局もあった。蚕業が非常に盛んで近郊は信州の佐久平と呼ばれる農地で稲田の緑が広がっていたという。風俗は雅致で学校生徒は洋服に束髪の男女多い。」というようなことを平澤は書き記していた。平澤は訪れた村や町，そして旅程中に受けた印象を書き残すことを原則としており，濃淡はあるが種々の感想を書き込んでいる。例えば東餅屋村で食べた豆粉餅が非常に高価であったことをぼやいたり，富士山の上に設置されたトイレについて「山上ニテ予輩最モ恐レ入リシハ雪隠ナリ其製焼石ニテ単簡ナル土台ヲ積ミ之ニ二三本ノ木材ヲ横ヘタルノミ一木片ノ醜体ヲ掩フ可キモノナク一タビ臀ヲ攝ゲテ跪クトキハ精英ナル望遠鏡ナリセバ日本全国ヨリ其状ヲ目撃シ得ン」と描写してみたりしている。また，河口湖では高嶺秀夫が漁師を雇って湖に網を牽き，獲った魚を生徒に振る舞ったという逸話も載せている。

甲府では名産の果物にとうとうと述べた上で「此郭内又葡萄酒醸造所アリ有名ナル山梨産葡萄酒ト称スル者ハ此所ヨリ醸出スルモノナリ葡萄ハ外国種ニシテ外観宛然山葡萄（カマイビ）ノ如ク之ヲ培養スルニ棚ヲ用ヰズ自在ニ地面ニ匍匐セシム期来レバ一方ニテハ之ヲ磨リ潰ブシテ汁ヲ絞リ一方ニテハ其汁ヲ蒸餾ス而シテ粗悪ナルモノハ以テアルコールヲ製シ又滓ボリ糟即チ皮ハ焼テインキヲ製スト云フ会社ノ主任者某ハ久シク米国桑港地方ニテ此業ニ従事シ培養醸造共ニ熟練ナリト云フ該酒ノ値ハ市中ニテ一合七銭位ナリ又此葡萄ヲ培養スルハ唯此城郭内ノミナリト云フ以テ其業ノ度ヲ推知スルニ足ル」とワイン工場での観察を詳細に記録している。また，さすがに高等師範学校であるから甲府市内の学校を視察したりもしている。

箱根では一週間余の滞在をしている。おそらくは学習活動のための滞在だったのであろう。特に岩川教諭の指導による生物の採集が多かった。

(3) 演　習

高等師範学校の修学旅行というので町村によっては小学生や師範学校生，時には行政関係の主立っ

た人間が迎えに来たり，時には食事等の接待なども受けている。修学旅行は行軍を元にしていたものではあったので常に威儀を正して行進していたわけではない。出迎えがあったり，人口周密の市街地を通過するときは住民の眼差しを意識して「我々一同ハ是ニ答フルニ厳整ノ姿勢ヲ改ムルニアリテ端然銃ヲ肩ニシ歩ヲ喇叭ニ和ス」と毅然とした行軍を行ったけれど，このような第三者の眼がないとき，すなわち「常時ハ随意ノ姿勢ニテ歩行シ得ルナリ」と手を抜いていた。

8月10日には北佐久郡塩名田村に立ち寄ったが，ここでは近郷四ヶ村の行政職員や学校の教員生徒らが出迎えに来ており，砂糖麦湯及鶏卵の接待を受け，その後学校の視察をしたが「吏員及教員等ノ乞ニ応シ」て千曲川を挟んで軍事演習を行っている。見物のために「市中ノ男女走テ河岸ニ萃マリ老幼男女雲ノ如シ」という人気ぶりであった。

3　おわりに

今回紹介した平澤金之助の日記によって従来『創立六十年』等にわずかな掲載がなされていたにすぎなかった最初の修学旅行の実態が明らかになったと思う。前年には「八月十八日出発上野横川より信州軽井沢甲州甲府等を経て帰校するの見込にて日数二十余日間の予定なりしが信州追分地方は流行病ありとの報ありたれば俄に方向を転じて野州鹽原地方へ出発せり其生徒は六十一名にして之を三小隊五半小隊十二分隊に編制し中隊長小隊長は兵式体操教師之を担任し半小隊長分隊長は生徒交番之を務め伊藤曹長之を引率し職員は高嶺教頭中川岩川国府寺野口坪井小山黒田の諸教官にして其他吏員喇叭手看病手等総員八十六名にして八月十九日出発せり」[11]という形式で「行軍」が行われている。横川まで汽車に乗り，その後行軍しているところを見ると基本的にこの行軍を踏襲して修学旅行は実施されたのである。実際の「学術上の実地観察研究」については概要にかいつまんで紹介したが，詳細は『日誌』を読んでいただきたい。既に紹介した明治22年の福岡尋常師範学校の修学旅行では学術研究的な要素は非常に少なかったが，高等師範学校では実に意識的に実地観察研究が取り入れられていることがわかる。

また今回は翻刻しなかったが，この『旅行日誌類』に綴じられている他の旅行日誌も近々復刻して紹介する所存である。

注

（1）　新谷恭明「明治期の師範学校に於ける修学旅行について―史料紹介；福岡尋常師範学校生徒の旅行日記―」（『九州大学教育学部紀要』第41集　1995）

（2）　水原克敏『近代日本教員養成史研究』風間書房1990 を参照のこと

（3）　『教育時論』第99号　明治21年１月15日

（4）　東京文理科大学・東京高等師範学校『創立六十年』 1931 32頁

（5）　同上　39頁

(6)『平澤家系譜』(平澤家文書)

(7)『履歴書原簿』(平澤家文書)

(8) 前掲『創立六十年』及び『文部省年報』

(9)『履歴書原簿』(平澤家文書)

(10)『郵便報知』(明治20年8月20日付)によれば「昨日は天明六年丙午正月元旦の皆既以来,あたかも百一年目に遭遇せる日蝕皆既の当日にて,我が東京はその皆既線内にはあらざれども,既に九分九厘余の食分なれば,誠に稀有の珍事とて,府下の人民は首を伸ばしてその日の到るを待ちし」云々とあり,国民は相当盛り上がっていたようである。ちなみに日本鉄道会社は皆既日蝕の観察が予定されていた白河－上野間の日帰り臨時列車を出したという(『東京日日』明治20年8月14日)

但し,上記の新聞記事は『明治ニュース事典』(毎日コミュニケーションズ)より引用した。

(11)『教育時論』第50号』明治19年9月5日

【史料】

平澤金之助「六州游記」

凡例；

本史料は平澤立世氏所蔵文書所収の『旅行日誌類』所載の「六州游記」を翻刻したものである。旧字は原則的に当用漢字に改めたが，現在使用されていない文字などはそのまま載せた。しかし，明確に本人の誤りと思われる文字については推測される文字をあてがっている。

丁，仆，〆はそれぞれコト，トキ，シテと表記した。

裏表紙

六州遊記　　ひらさは

表紙

旅行日誌類　　平澤

明治二十年八月六日ヨリ九月四日ニ至ル修学旅行日誌

六日　午前三時三十分起床四時三十分発程六時上野ヨリ汽車ニテ出発ス通過スル所ノ宿駅停車場ハ王子六時十五分赤羽六時廿分浦和六時四十五分大宮六時五十八分上尾七時廿分桶川七時廿七分鴻ノ巣七時四十七分吹上七時五十八分熊ヶ谷八時十八分深谷八時四十五分本所九時五分新町九時二十七分高崇九時四十分飯塚十時三分安中，磯部十時四十分松枝十時五十七分横川十一時十五分等合計拾八所ニシテ之ヨリ汽車ヲ下リ正午坂本駅ニ着シ藤橋新次郎方ニ投宿ス該所ハ群馬県碓氷郡ニ属シ寂寥タル一市街ナリ

七日　午前四時起床五時発程碓氷嶺ノ旧道ヨリ登リ八時十五分峠ノ頂キナル碓氷町ニ着シ此ニテ暫時休憩ス碓氷峠ハ近時新タニ道路ヲ開鑿シ馬車ノ往復自在ナルガ此日ハ一両日前ノ雨天ニテ新道ハ極メテ泥濘ナル由ナレハ故サラニ旧道ヲ択ビシガ聞キシヨリハ峻岨甚シカラズ之ヨリ軽井沢九時ヲ過キ靴掛十時三十分ニ着シ土屋方エ投宿ス

八日　午前三時三十分起床四時三十分発程直チニ浅間山ニ向フ朝来天気極メテ清鮮ニシテ浅間嶽目前ニ聳峙シ珍瓏彩粲ヲ待ツモノヽ如シ衆喜躍シテ進ミ相願シテ謂ラク麓ヲ距ルコト十数町ナルベシト而シテ大約一里ヲ進メル後モ其距離尚ホ初メノ時ノ如シ六時十分花田ノ嶺ニ達ス此嶺ハ浅間山ノ重麓ニアリ遠クハ上下二野及甲信諸国ノ諸山嶺ヲ望ミ近クハ浅間及小浅間ノ二嶺目前ニ屹立スルヲ見ル衆此ニテ一休ス教師小山氏写真器ヲ出シテ浅間ノ景態写取ス之ヨリ小浅間山ノ中腹ヲ経テ行者戻シト呼ブ

所ニ至ル此所ハ小浅間ト浅間山トノ間ニアリテ此所ニ至ルマデハ途次左程ノ難所モナカリキ是ヨリ先キ靴掛ヲ発スルニ臨ミ登嶽ノ案内者四五名ヲ雇トヒ之ヲシテ麦湯各二三斗ヅヽヲ担ハシム是レ浅間ハ噴火山ニシテ山上一滴ノ水ヲモ得ベカラザレバナリ是ニ於テ携フ所ノ麦湯ヲ卸ロシ飲テ餲ヲ医ス麦湯饒多ナルニ非ルヲ以テ小盃ニテ一杯ヲ過クル能ハス諢言ニ所謂ユル焼石ニ水ニテ毫モ餲ヲ医スルニ足ラズ衆悄然タリ既ニシテ不図左方ヲ見レバ砂礫一壁雲ヲ衝テ直立ス真ニ是レ一檣壁ノ我ヲ遮ギルモノヽ如シ導者曰フ是レ登山ノ口ナリト衆愕然相顧ミテ言ナシ休憩暫時ノ後漸ク意ヲ決シテ登ル手足共ニ歩ス足ヲ進メテ地ヲ踏メハ砂粒是ト共モニ流レ一進一退常ニ一所ニアルガ如シ復更ニシテ細砂全ク絶ヘ一望只赭赤色ノ焦石脚下ニ磊々タルノミ樹木ハ幾ンド其跡ナリ只数種ノ雑草散布セルノミ漸ク登ツテ下界ヲ望ミ小浅間山ヲ脚下ニ見ルニ至ツテハ已ニ五千尺ノ上ニアリテ草木全ク絶ヘ一望焦石ノミ此時ニ至リ天漸ク爽カナラズ雲両脚下ニ起リ時トシテ朦霧咫尺ヲ弁セズ同行百余ノ人モ一離一続何ヅレノ天ニアルヲ見ルベカラズ只知ル我独リ雲中ニアリテ焦石ノ上ニ孤立スルヲ已ニシテ時已ニ十時ニ近ク餓饉并ビ至リ一歩モ進ムベカラズ乃チ携フル所ノ握飯ヲ食フ友人数輩来リ合ス即チ約スラク以後百歩毎ニ一休スベシト乃チ歩ヲ始ム二三休ノ後ハ百歩ノ苦痛ニ堪ユル能ハズ六七十歩ニ一休シ十時三十分ヨリ十一時頃迄ニ衆全ク頂上ニ達ス寒甚シ衆皆外套ヲ着シテ相抱合ス噴火口ハ山ノ絶頂ノ中央ニアリ周囲凡半英里其周囲ハ幅十間計カリ平坦ニシテ宛カモ池辺ノ堤ノ如シ孔中轟々トシテ鈍大ナル響アリ噴出スル所ノ煙ハ硫臭鼻ヲ突ク顔ヲ延バシテ孔中ヲ望メバ煙烟壅塞一物ヲ見ズ只熱気ノ顔ヲ温ムルヲ知ル教師桜井，西ノ両氏其見ル所ヲ以テ生徒ニ講演セラル桜井氏ノ概算ニヨレバ此山ノ高八千二百五十二尺ナリト云フ俄頃ニシテ噴火口中煙稍希少トナリ内部窺フ可シ教師小山氏又孔中ノ状態ヲ写取ス予ガ見ル所ニテハ深サハ得テ知ルベカラズト雖トモ下方ニ至ルニ至テ稍ク狭ク宛カモ摺鉢状ヲナシ側壁ハ赭赤色ノ土石層ヲナシテ一面硫黄ヲ付着シ去ナガラ瓦焼ノ竈ヲ窺フガ如シ而シテ其側壁ニ無数ノ小孔アリテ之ヨリ噴出スル瓦斯合シテ一大雲煙ヲナス初メ余思ヒラク火山ノ烟リハ地下ヨリ一大孔ヲ通ジ直ニ噴出スルモノナルベシト而シテ今全ク想像外ニアリ帰路嶽ノ西方ニ出テ追分ニ向テ下ル道路絶険登路ノ日ニアラズ粗大ナル焦石磊々地ニ布キ絶テ人跡ノ存スルヲ見ズ家フルニ傾斜ノ度一層甚タシキヲ加ハヒ行歩ノ難得テ名状ス可カラズ百余人ノ衆寂トシテ声ナク唯石塊ノ磊々耳ニ轟シキヲ聞クノミ皆能ク呼吸シ得ル者ナシ俄頃ニシテ雲霧上下ニ塞カリ細雨面ヲ吹ク顧ミテ上巓ヲ望メバ茫トシテ一物ヲ見ズ俯シテ下ヲ望メバ朦乎トシテ千仞ノ淵ニ臨ムガ如ク一躓スレバ馮夷ノ幽宮ニ陥ラントス朦霧ノ中其何レニ至テ止マルヲ測ルベカラズ幾多ノ同行アリト雖トモ何ヲ以テカ罹災ヲ救助シ得ベケンヤ歩々是レ死地ニ入ルガ如ク親アルモノハ之ヲ回想シテ心ニ哭シ妻子アルモノハ之ヲ追懐シテ密カニ悲シム流汗身ニ溢レテ雨ト共モ交ハル此ニ於テ乎悚然トシテ後人ヲ顧ミレバ岩石転々我頭ニ向テ落ツ危険言フ可カラズ暫クシテ道漸ク易ニシテ雑草ノ所々ニ散布スルヲ見ル以テ山巓ノ已ニ遥カナルヲ徴ス可シ衆此ニ至テ始メテ蘇生ノ思ヘアリ互ヒニ其恙カナキヲ賀シ相謂テ曰ク子孫百代ニ至ル迄誓ツテ此険ヲ踏ム可カラズト行歩ノ難已ニ此ノ如キヲ以テ百余人ノ同行点々断絶シ前後相去ルコト一里ニモ及ブ可シ而シテ導者ハ其先鋒ニアルヲ以テ最後ノ一隊ハ朦霧ノ間ニ彷徨シ何レニ行進スベキヤヲ知ラズ乃チ号呼シテ信ヲ先隊ニ通ズ暫クシテ導者帰リ来リ荊棘ノ間ヲ踏ンデ漸ク道路ニ出デ追分駅ニ着シタルハ午後四時頃ナリキ生等ノ隊ハ大黒屋ニ宿ス此地ハ年中絶テ蠣ヲ用ウルコトナシト有名ノ旅舎油

屋ハ教員及他ノ役員ノ宿所タリ市街ハ大ナラズト雖トモ家屋ノ稍大ナルモノ軒ヲ連ネ貸座敷ノ如キモ美麗ナルモノ三四戸見ヘタリ

九日　五時起床六時発程追分駅端ノ郊野ニ於テ教諭浅井大尉ノ演習講義アリ十時北佐久郡岩村田駅ニ達ス生徒一同道路ヲ夾ンデ出迎ス都ベテ途次小学生徒ノ出迎アルカ又ハ人家周密ノ市街等ヲ通過スルトキハ我々一同ハ是ニ答フルニ厳整ノ姿勢ヲ改ムルニアリテ端然銃ヲ肩ニシ歩ヲ喇叭ニ和ス常時ハ随意ノ姿勢ニテ歩行シ得ルナリ休憩ハ毎五十分毎ニシテ道程三里位毎ニ一大休憩所ヲ予設シ与フルニ麦湯ヲ以テス必ズ冷水ヲ飲ムヲ許サズ只時々顔ヲ洗フト口ヲ嗽カシムルトノミ盖シ疾病ヲ醸サンコトヲ憂レバナリ是レヲ以テ各地ノ学校若クハ他所ニテ生徒ヲ慰労セント乞フモノアレバ一ニ皆麦湯ヲ以テセシム此日生等ノ隊ハ同所出沢七之助方ニ宿ス此駅ハ高嵜以来此ニ至ル迄ノ最上位ヲ占ムベキ地ニシテ人家モ五六百戸アリ裁判郡衛警察等アリ印刷局モ又設置シアルヲ見ル蚕業頗ル盛ニシテ近郊ハ信州ノ佐久平ト呼ナヒ一望田野ニシテ稲田緑々茂ヲ争フヲ見ル風俗モ亦雅致ニシテ学校生徒ニハ洋服及束髪ノ男女多カリキ

十日　四時起床五時出発　四十分ノ後北佐久郡平塚村ニテ一休ス生絲製造所数ヶ所アリ水車ヲ以テ数十ノ糸枠（ワク）ヲ運転シ蒸気鑵ニテ湯ヲ沸カス婦女四五十名ヅヽアリ皆雙手ヲ以テ鍋ヨリ糸ヲ引出シ糸枠ヲ転ラスノ労ナシ六時四十分同郡塩名田村ニ着ス此村ハ千曲川ノ沿岸ニアリ一小市街ヲナス近郷四ヶ村ノ吏員及同所ノ教員生徒等出迎アリテ砂糖麦湯及鶏卵ノ饗アリ了ツテ同所ノ学校ニ至リ生徒ノ体操ヲ一覧シ終リニ吏員及教員等ノ乞ニ応シ千曲川ヲ夾ンデ演習ヲ行フ一隊ハ千曲川ノ北岸ニアリテ之ヲ敵軍トシ一隊ハ南岸ニアリ更ニ一隊ヲ学校ノ傍ラニ置キ之ヲ本隊トス余ハ此隊中ニアリ已ニシテ砲声交々起ル市中ノ男女走テ河岸ニ萃マリ老幼男女雲ノ如シ已ニシテ砲声甚タシ敵破レテ潰走ス南岸ノ兵之ヲ尾撃ス本隊更ニ発砲シテ之ヲ追ヒ剣ヲ抜キ銃ニ挿シ橋ヲ済ツテ疾ク進ミ北岸ニ至ツテ號号終リヲ報ズ戦中ノ状況ノ如キハ精神混乱シテ耳目ニ存セズ千曲川及其舟梁ノ状況ノ如キモ絶テ見サルモノヽ如シ川ノ北岸ハ即チ御馬奇村ナリ同所ノ町田静方ニテ一同休憩ス先キノ吏員及教師ヨリ再タビ砂糖麦湯及多量ノレモン水等ノ饗アリ凡ソ旅行中待遇ノ厚キ長野県ニ若クモノナカルベク特ニ佐久郡ハ最モ着ルシク戸長筆生及教員生徒等至ル所ニ出迎シ警部巡査等ハ或ハ二名或ハ三四名ツヽ前後ニ従テ人民ヲ警シム此一事ハ他県ニ於テ見サル所ナリキ已ニシテ御馬奇村ヲ発シ少時ニシテ御牧村ニ到リ同所学校ヲ一覧ス教師一同又麦湯ノ饗ヲナス十時廿五分同郡望月町ニ着予カ隊ハ山月屋藤之助方ニ宿ス

十一日　四時起床五時発程七時三十分笠取峠ニテ大休憩八時二十分長久保駅ヲ過ク該駅ハ道路ハ狭ケレトモ人家稠密且閑雅ナリ十時三十分和田駅ニ着シ翠川与右衛門ニ宿ス宿ハ大ナレトモ待遇甚タ失敬ナリキ

十二日　三時起床四時出発和田峠ニ登ル碓氷ニ比スレバ傾斜稍々甚シク行歩困難ナルヲ覚ユ思モフ予若シ独リ此峠ヲ登リタランニハ其労果シテ何如ンゾヤ唯知ル身衆人ノ中ニ交ツテ相談シ相笑ヒ或ハ衆声等シク唱歌シ或ハ喇叭ノ為メニ其勇ヲ励マサレ為メニ十分ノ苦痛ヲ除去セラレタルコトヲ山頂黒曜石多ク点々道ニ布ク七時山巓ニ達シ東餅屋村土屋藤八方ニ大休憩ス該所ハ豆粉（キナコ）餅ヲ以テ著名ナリ即チ一盆ヲ買フ諺ニ曰ク飢エタルトキニ粗食ナシトカヤ其味ノ美ナル喩フル二物ナク六箇ノ小餅何レノ喉ヲ通過シタルヲ知ラズ値ヲ問ヘハ即チ曰ク三銭ナリト是亦珍ラシキ高価ニシテ今坂大ノ黄粉（キナコ）餅一箇五

厘トハ恐レ入ツタリ因テお換ハリヲ中止シタリ之ヨリ同所ヲ発シ八時西餅屋村ニ至リいぬかひ六兵衛方ニテ休憩ス該所ノ名物モ亦餅ナレトモ已ニ頂戴スルノ意ナシ十時諏訪郡下諏訪村ニ着シ油屋方ニ宿ス内温泉アリ入浴時ヲ択バズ頗フル其便ヲ感ズ該村ハ諏訪湖ノ東南岸ニ位シ人家四五百戸モアリ繁花ナル一市街ナリ諏訪神社アリテ結構壮麗ナリ諏訪湖ハ教師桜井氏ノ実測ニヨレバ其最モ深キ所ト雖トモ五間ニ過キズシテ平均四間位ナリト周囲ハ土人ノ説ル所ニヨレハ大凡四里アリト云フ海面上二千四百尺ノ高地ニアリ湖水ノ周囲ハ人家到ル処ニ散布シ製糸業盛ンニシテ婦人ニシテ廿銭ヨリ廿四五銭ノ賃金ヲ得ルト云フ以テ其生活ノ裕大ヲ想像スベシ

十三日　五時起床六時発程上諏訪村ニ向フ此村ハ下諏訪村ヲ去ルコト一里余ニ過ギス等シク湖水ノ沿岸ニアリ東西相望ム可シ途次時刻尚ホ早クシテ旅舎ノ準備未タ整ハザランコトヲ恐レ路傍ノ一社内ニ休憩ス浅井大尉諏訪ノ七不思議ヲ探知シ笑ヲ忍ンテ一同ニ告ゲラル予メ言ラク此談素ヨリ信スヘカラス只聞ク処ニシテ伝ヒテ談柄ニ供スト其一ニ曰ク　同村ノ九頭井神社ニ魚ヲ献スルノ礼アリテ其中必ス一眼ノ魚ヲ発見スト二ニ曰ク御渡リトテ湖水堅氷ヲ結ビ初ムルトキ氷上ニ罅隙ヲ生ズ之レ諏訪神ノ渡リ玉ヘシ徴ニシテ是ヨリ人馬共モニ氷上ヲ往来シ得ベシト

三ニ曰ク塔ノ影トテ湖辺ノ某社ノ戸隙ヲ窺ヘバ嘗テ近傍ニ建テアリシ塔ノ今ハ痕跡ダモ存セザルニ其影ハ以前トシテ見ルベシト四ニ曰ク耳裂ノ鹿トテ諏訪ノ酉ノ祭リニ鹿頭七十五ヲ供ス其中必ス八箇ニ裂ケタル耳ヲ有セル鹿一頭ヲ□□存スト五ニ曰ク天滴水トテ某所ニテ水ヲ滲出スルコト一日三滴若シ旱魃ノトキ水一滴ヲ得テ携ヘ帰テ雨ヲ祷レバ必ズ徴アリ但シ途次休泊ヲ許サズト六ニ曰ク元旦ノ蛙トテ正月一日ニ某所ノ蛙其向フ所其ノ方向ナレバ災アリト七ニ曰ク神作田トテ諏訪社ノ水田ニ植ウル稲ハ所々ノ苗ヲ持チ来テ植ウルモノナレドモ其収穫ハ常ニ一様ナリト」已ニシテ同所ヲ発シ八時上諏訪村ニ着増屋ニ宿ス又温泉アリ湯本ハ同庭内ニアリテ深サ六間ノ井ナリト云フ熱度高クシテ手ヲ触ルベカラズ水ヲ注入シテ浴用ニ供ス硫臭アリ該地ニハ温泉所々ニアレトモ田宮下鶴間ノ二ヶ所ヲ名アリトス温度百八十四度ナリト云フ該地ハ人家千四百戸計リアリテ下諏訪ニ比スレバ遥ニ盛ンナリ市街ノ西方二町計カリシテ遊郭アリ見ルニ足ラズ更ニ一二町ヲ経テ高嶋城墟アリ諏訪頼重ノ守リシ所ニシテ今ハ公園地タリ城壕ハ幅二間計リニシテ誠ニ児戯ノミ今ハ蓮及慈姑ノ一面ニ茂生スルヲ見ル該地ヲ去ルコト更ニ一二町同村五百三十八番地塩原政孝方ニ炭火水素瓦斯ヲ生ズル意アリ引テ以テ点燈及炊爨ノ用ニ供ス其発見ハ今ヨリ四年前ニアリテ偶然井中ヨリ泡出スルヲ発見シ試ミニ之ヲ萃メテ点火シタルニ始マルト云フ

十四日　四時起床五時発程諏訪郡金沢村着ス時正ニ十時二十分ナリ同所ハ寂寞タル一小市ニシテ宿スベキノ旅舎ナカリキ

十五日　三時起床四時発程七時廿分蔦木村ニテ暫時休憩之ヨリ十四五町ニシテ釜梨川アリ之即チ甲信二州ノ境界ニシテ対岸ハ山梨県北巨摩郡鳳来村ヨリ此辺ハ花剛石特ニ夥タシク川筋一面花剛石ナリ之ヨリ一里半計リニシテ管原村ニ至ル松林蓊鬱道ヲ夾ミ一望際涯ナシ同県吏及郡吏待受ケラレ砂糖麦湯ノ饗アリ傍人告テ曰ク此松林松茸ノ産夥シク其盛ナルニカツテハ足テ容ル丶ニ所ナシ然レトモ官林ニシテ警衛厳ナルカ為メ人民ハ毫モ之カ利ヲ得ル能ハズト已ニシテ同地ヲ発シ十時台ヶ原村ニ着小松屋ニ宿ス此日行程六里道路ハ諏訪以東極メテ平坦ナレトモ塵埃千丈幾ント呼吸ヲ絶スルカ如シ

十六日　四時起床五時出発　行程二里ニシテ円野学校ニ至リ大休憩九時三十分韮崎ニ着シ鉄商清水武兵衛方へ宿ス此所ハ郡衙警察等アリテ皆立派ナリ市街モ繁花ニシテ諏訪ト甲府ノ間ノ最上位ニアリ此日行程四里余

該地気象　気圧二十八インチ六六　温度華氏八〇度一五六　高千二百七十尺

十七日　四時起床五時出発七時五分中巨摩郡竜王村ニ至ル同村学校教師ヨリ麦湯及砂糖ノ饗アリ山梨県尋常師範学校幹事生徒数名ヲ従ヒ同地迄出迎セラル是ヨリ同地ヲ発シ九時甲府ニ着シ柳町二丁目米倉方ニ宿ス甲府ハ甲州第一ノ繁盛ト市街ニシテ商売輻湊車馬嗔咽ママ其景況ヲサヲサ東京ニ譲ラズ戸数ハ五千戸ヲ過クコト多カザルモ市街ハ比例ヨリ大ナリ人口ハ一万七千アリトトゾ而レトモ完美ナル旅舎ナキハ我々ノ為メニハ一大夫典ナリキ裁判所県庁山梨郡衙戸長役場等ハ都テ市街ノ西北ニ集合シ何ツレモ壮麗ナリ県会議事堂モ目下建築中ナリキ監獄署ハ之ヨリ稍距レテ北方ニアリ此日山梨県尋常師範学校教員及生徒数名我々一同ヲ導テ諸所ヲ案内セラル其見ル所左ノ如シ

甲府ノ北方ニ一城墟アリ浅野長政ノ建築セル所ニシテ周囲一里実ハ半里位ナリトト云フ今ハ只城壁及壕ヲ存スルノミ郭内ニ果園アリ珍果多シ「ブランデー」ト呼ベル果実アリ枝葉状態宛カモ李ノ如ク大サ桃実ノ如ク稍楕円状ヲナス其色暗紫色ナルアリ又淡緑色ナルアリ樹ノ種類ニ従テ其色ニ差アリ試ニ之ヲ味ヘバ採リ置キノ腐レ李ノ如シ僅カニ甘味ヲ存スルノミ而シレトモ其累々トシテ枝ヲ屈曲スルニ至レルノ様ハ実ニ見事ト云フノ外ナシ林檎及杏等アリ大サ巨梨（ヲヽナシ）ノ如シ何レモ簇々トシテ念珠ヲ連ネタル如シ人目多クシテ味ヲ試ムル能ハザルヲ憾ム概言スルニ此国ハ全国中果実ニ冠タル向ナレハ従テ美果モ亦多カリシ此郭内又葡萄酒醸造所アリ有名ナル山梨産葡萄酒ト称スル者ハ此所ヨリ醸出スルモノナリ葡萄ハ外国種ニシテ外観宛然山葡萄（カマイビ）ノ如ク之ヲ培養スルニ棚ヲ用ヰズ自在ニ地面ニ匍匐セシム期来レバ一方ニテハ之ヲ磨リ潰ブシテ汁ヲ絞リ一方ニテハ其汁ヲ蒸餾ス而シテ粗悪ナルモノハ以テアルコールヲ製シ又滓ボリ糟即チ皮ハ焼テインキヲ製スト云フ会社ノ主任者某ハ久シク米国桑港地方ニテ此業ニ従事シ培養醸造共ニ熟練ナリト云フ該酒ノ値ハ市中ニテ一合七銭位ナリ又此葡萄ヲ培養スルハ唯此城郭内ノミナリト云フ以テ其業ノ度ヲ推知スルニ足ル已ニシテ郭内ヲ出テ城壕ニ沿テ城ノ西北ヲ環ル爰ニ監獄署ノ設ケアリ之ヨリ北方数町ニシテ遊郭アリ之ヲ望ムニ何レモ可ナリノ建築ナク更ニ北方十町計カリニ又武田氏三代ノ館趾アリ矮狭ニシテ方三十間計カリ中ニ新築セル一家屋アリ中ニ武田神社ヲ奉祀ス又傍ラノ雑草内ニ武田神社拝殿建築所ト記セル榜アリ又此処ヨリ東南二三町ニ方リ寺アリ大泉寺ト云フ武田氏三代ノ像ヲ祭ル寺僧ニ乞フテ之ヲ見ル像ノ大サ三尺計アリ中央ニ坐セルハ武田信虎ノ像ニシテ雍髪緇衣顔面皺襞多ク六十余歳ト覚ヘタリ其左ハ即チ信玄ニテ白毛ノ兜ヲ頂キ緋威ママノ冑ヲ穿チ巨眼ヲ張テ軍扇ヲ握リ威風漂乎トシテ床ニ踞シタルノ様ハ一嗟三軍ヲシテ慴服セシムルノ勇ヲ表出セリ又右ニ踞シタルハ信玄ノ子勝頼ノ像ニシテ烏帽子直衣ヲ着シ顔貌温和ナル一美少年ニシテ八重垣姫ノ慕ヘタルモ尤モナリト思ハレタリ寺ノ左リニ一小丘アリ夢山ト名リ中院大納言通躬卿ノ夢山春曙テウ題ニテ　きのふまてめなれし雪は夢山の夢とぞかすむ春のあけぼの　ト詠ンダルニヨリテ甲斐名所ノ一トナレリ又此近郊ノ田畝ニ於テ一種ノ蜀黍（モロコシ）アリ穂頴皆彎曲シテ地ニ俯ス其状鉤ノ如シ伝ヒ言フ古昔信玄ノ一瞥セルトキ慴伏シタリシモノニテ此類ノ蜀黍ハ此国ニ固有ナリトゾ呵々

府中ノ水ハ非常ニ塩分或ハ硫分ヲ含ミ飲料水ハ宜キモノ少シ地勢四面皆山ニテ西方ニ八ッヶ嶽アリテ

東方ノ一所纔カニ山ヲ夫リ八ッ代，都留，山梨三郡ノ水皆爰ニ注流シ甲府近傍ハ一面ニ湖水ナリシガ養老年間ゐぎやう上人来ツテ其水路ヲ開鑿シ天良地ヲ開キタレバ其功ヲ賛美シ今ニ至ル迄其淵ヲ称シテ禹ヶ瀬ト呼ブト云フ蓋シ禹ノ功徳ニ比シタルナラン釜梨川市街ノ西ヲ擁シテ流ル古ハ時々溢流シテ市街近地ヲ浸セシガ武田信玄ガ西方龍王村ト云ヒル所ニ一大堤防ヲ築キシヨリ今ニ至テ其災ヲ免ルト云フ堤上ニ周囲二三擁ノ欅数多アリ山林共進会ニテ全国第二等ノ賞ヲ得タリト云フ郡内ハ一山脈ヲ距テ、甲府ノ東方ニアリ盛ンニ甲斐絹ヲ製出ス此地ハ昔時ハ他方ト全ク風俗習慣ヲ殊ニシ彼レハ山西ノ人ヲ呼ンデ甲州ノ人ト云ヒ山西ノ人ハ彼ヲ呼ンデ郡内ノ人ト云ヒ全ク他国人ヲ以テ相視タリトゾ今ニ至ツテ多少風俗ニ差アリト云フ水晶ハ此国ノ産物ニシテ御嶽ノ麓宮ノ下村ヨリ最モ多ク産スト云フ

十八日　滞在　前日ヨリ暑気甚タシ幾ント身ヲ処スルニ苦シム此日十二時尋常師範学校ヨリ我々一同ヲ招待シ昼飯ノ饗応アリ膳部ハいりとり及鶏肉ノ吸物等ニシテ外ニ葡萄酒及林檎菓子等ヲ沿ヘタリ右食シ了ツテ師範校及中学校附属小学校女子尋常師範学校等ノ校舎ヲ巡覧シテ帰舎セリ

十九日　四時起床五時発程七時二十分英村ニ至ル同村小学校ニテハ檐ニ数十ノ紅燈ヲ連ネ茶菓ヲ備ヘテ待受ケラレタリ右饗了ツテ九時黒駒村ニ着ス此所ハ純粋ノ村落ニテ旅舎ハ一軒ダモアルニ非ザレバ農家ヲ仮テ止宿シタリ此日宛カモ日蝕ニ際シ然カモ一天曇リナケレバ詳ラカニ其状ヲ観察シ得タリ其方玻璃ノ一小片ヲ取リ燭火ヲ以テ煤炭ヲ附着セシメ以テ太陽ヲ窺フニアリ而ルトキハ日光ハ皆煤炭ニ吸収セラル、ガ故ニ毫モ目ヲ傷ムルコトナク太陽ノ実態ヲ詳ラカニ見ルコトヲ得更ニ一法アリ日光ノ照射セル幕或ハ戸障子ニ一小孔ヲ穿チ之ヨリ射入セル光線ノ床上ニ映ズルヲ見レバ判然蝕日ノ形ヲ表ハス只其彎曲セル部ノ彼此相反対スルノミ以上ノ方ニヨリテ観察スルニ二時三十一分頃ヨリ右方ヨリ蝕ヲ始メ三時四十三分ニ至ツテ其極ニ至ル此時太陽ハ九分六七厘迄其形ヲ夫キ四山模糊トシテ霞ヲ帯ビ日光暗淡トシテ温熱頓ニ減シ肉眼ニテ直チニ蝕ヲ窺フ可シ飛鳥塒ニ帰ラントス恒星一箇太陽ノ左方ニ現出シタリ日ニ是レ稀有ノ現象ニシテ一時ハ物凄キ有様ナリキ只憾ムラクハ皆既蝕ヲ見ル能サルヲ已ニシテ太陽ハ次第ニ其大サヲ加ヘ四時四十分全ク旧ニ復セリ

二十日　三時起床四時発程二里半後御坂峠ニ到ル坂路峻険遥カニ碓氷和田ノ上ニ駕ス然レトモ北方ノ坂路ハ水流常ニ経路ヲ纏フガ為メニ大ニ苦労ヲ減スルヲ得タリ攀登已ニ遥カニシテ頂ヲ去ル十四五町ナル所ニ一小居アリ菓子ヲ鬻グ之ヲ食テ一小休ス一小流アリ前ヲ流ル寒冷氷ノ如シ顔ヲ洗ハントスルニ手麻痺シテ久シク入ル、ベカラズ名ケテ行者水ト言フト云フ実ニ予ガ未タ嘗テ遭遇セザリキ冷水ナリ已ニ峠ニ達ス不図右方ヲ見レバ富士峯巍然トシテ目前ニ聳ヰ幾ント予ト鼻ヲ接ス白雪点々山巓ニ散布シ時アリテ片雲中腹ニ懸ル其状宛然図画ノ如ク巓ヨリ直チニ走ツテ踞ママヲ川中ノ湖水ニ浸シ水面玲瓏トシテ芙蓉ノ顔ヲ写ス万山蜿蜒トシテ嶽ノ左ニ起伏シ景色ノ絶佳善ク彷彿シ得ベキニ非ズ思フ富嶽ヲ見ント欲スルモノ須カラク此地ニ到ル可シ山巓山麓悉ク我眼中ニアリ富岳ハ遠ク之ヲ見ルニ宜シク行テ之ヲ登ルベキ所ニアラズ已ニシテ暫時休憩ノ後川口駅ニ向ツテ下リ九時二十分到着シ此日此ニ宿ス此駅ハ川口湖ノ東岸ニアリテ市内零落目ヲ触ル可カラズ逆旅主人我々一同ニ説テ曰ク登嶽セント欲セバ川口ヨリス可シ其便其捷他所ニ勝レリト蓋シ欺テ以テ旅客ヲ此ニ誘ハントスルノ意ナリ幾ント其言ニ欺カレントス然レトモ其街衢ノ不潔ナル旅舎ノ陋矮ナル旅客ノ少キ等ヲ参照スルトキハ疑団忽チ胸ニ生ゼザルヲ得ズ何ントナレバ甲信地方ノ登山者此地ヲ通過スルモノ年々少ナシトセス川口若シ登

山ニ便ナリトセズ其人何ゾ此地ニ宿シ又此地ヨリ登ラザル依テ密カニ其旨趣ヲ探クルニ果シテ偽リナルコトヲ看破セリ嗚呼登山セント欲スルモノ此手ヲ食ハザル様注意スベシ登山ハ必ズ吉田口ヨリスベシ此日教頭高嶺君漁夫ヲ雇ヒ網ヲ川中湖ママニ牽キ魚多量ヲ得タリ以テ生徒一同ニ賜ハル

二十一日　四時起床五時出発　八時二十分南都留郡福地村吉田ニ達シ刑部好太郎ニ宿ス家妻道者ノ白木綿地ノ綿入ヲ貸与セラル之ヲ着シテ暖気恰モ好シ吉田ハ人戸四百計リアリテ中々繁盛ナル市街ナリ此日ハ登山ノ用意ヲナス乃チ銃剣及背嚢等ハ直チニ須走駅ニ廻送シ又六七人宛ニ剛力ト唱フル道案内一人ヲ雇ヒ之ニ外套及履三四足外ニ弁当用餅ヲ担ヒ行カシムルモノトス（縁ニ曰フ切リ餅ハ富士山上ニ泊セルトキ朝飯ノ代ニ食スル都合ニシテ此時一人七截リノ割リナリキ而ルニ山上エ泊セルトキハ余マリノ空腹ニ堪ヘ兼ネ内二箇ヲ食シタリシニ剛力又曰ク其中一切リヅヽハ剛力ニ賜ハルコソ此山ノ例ナリト是ニ於テ翌朝ハ纔カニ四截リノ餅ヲ遺セリ以来山ニ登ルモノ若シ餅ヲ携フルナラバ沢山携帯スベシ（尤モ山上ニテ飯ヲ売レトモ食ス可カラズ）聊カ後人ノ注意ヲ喚ブノミ）旅舎ハ郵便局ヲ兼業セルガ待遇ノ厚キ未ダ其例ヲ見ズ

二十二日　五時起床六時発程ス駅端ニ富士神社ヲ奉祀ス市中ノ児童群リ来リ呼ンデ曰ク銭ヲ投ゼヨト応スルモノナシ失望シテ帰ル已ニシテ此社内ヲ過クレバ一望草原ニシテ茫々際涯ナク萩桔梗女郎花等人待テ顔ニ咲キ乱レ宛ナガラ錦ヲ織リナスガ如シ是レナシ所謂ル富士ノ裾野ニシテ其昔シ源右府ノ遊猟セラレタルコトヲ回想セラレタリ今ハ只一望緑艸ノ繁茂スルノミニテ一樹木タモアラザレバ獣類ノ如キハ絶テ其跡ヲ断チタルナル可シ行クコト一里半ニシテ松樹三株道ヲ挟ンテ植チ下ニ一茶亭アリ之ヲ中ノ茶屋ト云フ衆一憩ス此所ヨリ山頂ニ至ル各休憩所ニテ総テ茶一杯ノ値二厘トス已ニシテ該所ヲ

去リ又行クコト一里半ニシテ茶店三軒アリ之レ即チ裾野ノ終ル処ニシテ吉田ヲ去ルコト三里半馬ハ此所マデ通行スベシ故ニ名ツケテ馬帰ヘシト云フ一休シテ発ス之ヨリ愈々富士ノ真面目ニ取懸ルモノニテ樹木暗淡トシテ道ヲ掩ヒ行歩モ俄カニ難ヲ覚ユ少時ニシテ一合目ニ達ス（登山ノ道程ハ總テ七里アリ踈野ママヲ合シテ十里トス而シテ七里ヲ十分シ之ニ一合ヨリ九合迄ノ名称ヲ附ス）之ヨリ一合目毎ニ茶亭二三戸ヅヽアリテ湯茶ヲ得ルコト自在ナリ故ニ富士ノ登嶽ヲ以テ之ヲ浅間ニ比スレバ其安易ナルコト雲泥霄壌月鼈ノミナラズ地獄ト極楽程ノ差異アリト云モ可也一合目ニテ休止ノ後九時四分二合目ニ至ル此所ニハ茶屋ラシキモノナシ九時二十分三合目ニ至ル腹中漸ク空乏ヲ訴フ即チ剛力ヲ呼ビ弁当ヲ出サシメテ之ヲ食フ中食茶代三銭六厘ナリ外ニ神酒ト称シテ酒一壜ヲ出ス例各人ノ思フ所ニ其代価ヲ払フモノトス剛力言フ客ニヨリ十銭二十銭等一定ナラズト（之等ハ記スベキ程ノ事ナラネド只後ノ登山者ニ告グルノ備忘ニ供スルノミ）此日朝来天気晴朗ナラズ顧リミ山麓ヲ望メバ雲霧靉靆茫トシテ大海ヲ望ムガ如シ若シ晴天ナリセバ甲信両野三越等ノ諸山点々指スベシト

之ヨリ同所ヲ発シ九時ママ十分四合五勺ニ達ス茶亭アリ一休シ十時三十分五合目ニ達ス数ヶノ茶亭点々散布ス其初メナルヲ端小屋（ハナコヤ）ト云ヒ終リナルヲ止メ小屋ト云フ一休シテ又出ヅ道岐レテ二トナル右ハ御嶽（甲州）道ナリ乃チ左シテ登ル少時ニシテ道又二分ス，右ハ降山口ナリ又左シテ行ク十一時七分五合五勺ニ達ス一休シテ発シ十一時五十分六合五勺ニ至リ十二時二十分七合ニ達ス六合五勺ヨリ七合迄ハ巨岩大石相層重シ宛カモ楷子ヲ登ルガ如ク最険阻ナラント思ハレタリ之ヨリ七合三勺ニ至ツテ一茶亭ノ主人ニ命シ雪ヲ取ラシメ買テ之ヲ食フ八合目ニ至ル迄ハ道渇ヲ知ラズ二時六分第八合目ニ着シ我隊ハ錨屋惣兵衛方ニ宿ス

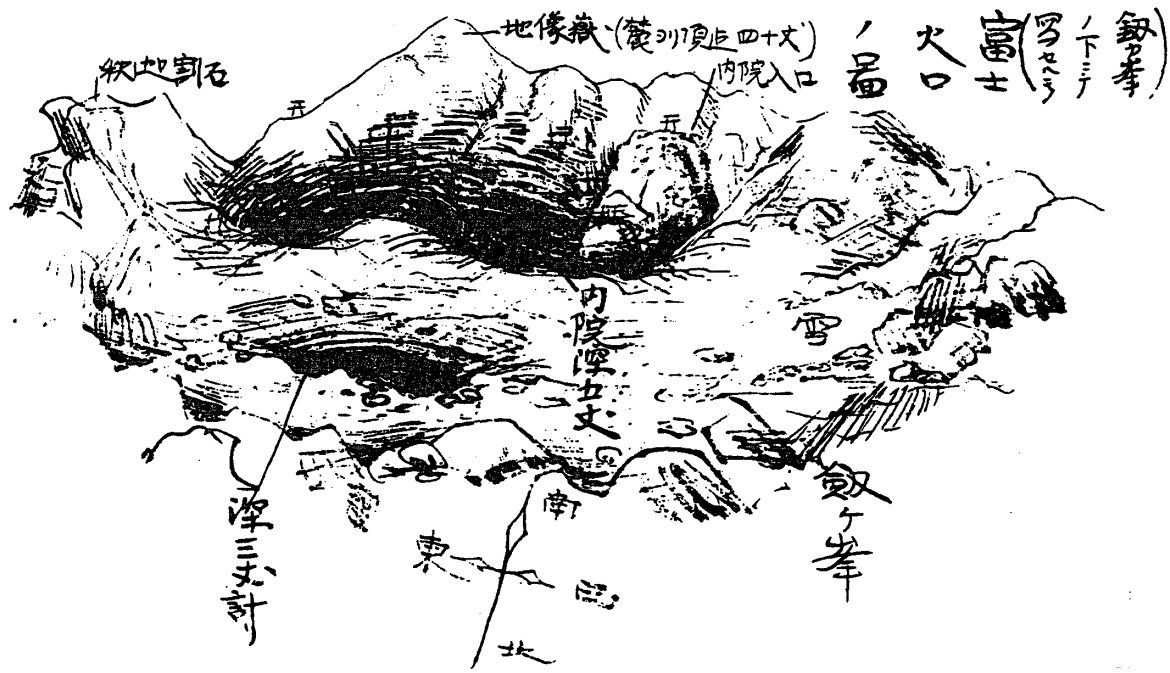
山麓ヨリ頂上ニ至ル迄植物ノ種類ヲ観察スルトキハ上下大ニ其気候ノ異ナルヲ推知スルニ足ルベシ萩桔梗等ノ草花ハ唯ニ裾野ニノミ繁茂シ馬帰シニ至テ尽キ一合目ヨリ以上ハ栢樅落葉松及矢車草等ノ草木最モ多ク蓊欝森林ヲナス四面望ムベカラズ四合目ノ近傍ヨリ櫻樹ノ散布スルヲ見ル其実（ミ）ハ未ダ熟スルニ至ラズ又癪雍樹（シャクナギ）アリ花将ニ盛ナリ五合目ヨリ以上ハ他ノ樹木幾ンド全ク絶ヘ矮小ナル榛（ハシノキ）一面地ニ匍匐ス其上宛カモ円ク刈リタル庭木ノ如シ一望皆之ナリ薔薇及矮小ナル落葉松其間ニ交ハル五合五勺ニ至ツテハ植物漸ク疎ニシテ之ヨリ以上ハ只虎杖（イタトリ）草ノ一種ノミ点々焦石ノ間ニ散見ス六合半ヨリ七合ノ間榛等ノ草木再ビ繁茂シ七合ヨリ以上又虎杖草ノミ少時ニシテ之亦全ク尽ク

白雪ハ七合ニ至テ所々ニ散見ス又六合半ヨリ以上ハ植物ナキヲ以テ茶亭ハ暴風ノ家ヲ倒サンコトヲ防ガンガ為メ樹木ヲ以テ家屋ノ棟梁ヲ作リ焦石ヲ積テ壁トナシ屋根板ノ上ニモ又石ヲ排置ス故ニ内部ハ暗淡トシテ空気ノ流通極メテ悪シ加フルニ室内僅カニ薄縁（ウスベリ）若ク藁席ヲ鋪キ土足ノ旅人縦マヽニ蹂躙スルヲ以テ不潔喩フルニ物ナシ之ニ宿スルトキハ蒲団一枚価二銭ヅヽ屋根代三銭飯一盃二銭ヅヽナリ若シ一切之ヲ賄ハシケレバ一泊料合計十六銭ナリト我々一同ハ特別ニ二銭ヲ附与シテ幾分ノ注意ヲ求メタリ蒲団ハ薄キ煎餅ノ如ク不潔ナルコト雑巾ノ如シ枕ハ一小樹片ニシテ石ニ枕スルカ如シ夜ニ至レバ寒益甚シク一二月ノ候ノ如シ衆皆外套ヲ附加シ常服ノマヽ蓐ニ就ク蚤ヤラ虱ヤラノ攻撃甚タシ但洋服ナレバ手ヲ入ルヽ能ハズ加フルニ二十余人一小室ニ雑入セルモノナレバ毫モ身ヲ動カス能ハズ為メニ当夜ハ一睡ヲモ結ブ能ザリキ

六合半ヨリ以上水ハ皆雪ヲ融解シテ之ヲ用ウ気圧ハ大ニ減少セル故水ノ沸騰点極メテ低クキヲ以テ飯

ヲ炊ケバ柔カニシテ心アルガ如ク寔ニハヤ味悪シ酒ハ此例ニ廉ニシテ一合三銭ヅヽナリキ
山上ニテ予輩最モ恐レ入リシハ雪隠ナリ其製焼石ニテ単簡ナル土台ヲ積ミ之ニ二三本ノ木材ヲ横ヘタルノミ一木片ノ醜体ヲ掩フ可キモノナク一タビ臀ヲ攝ゲテ跪クトキハ精英ナル望遠鏡ナリセバ日本全国ヨリ其状ヲ目撃シ得ン加フルニ其不潔物ハ之ヲ運ブノ地ナキヲ以テ千古ノ屎尿堆積シ風露雨雪ノ押シ廻ハスニ任ス臭気常ニ天ニ塞ガル此一事ハ実ニ生等ヲシテ悄然タラシメタリ故ニ予輩ハ已ムヲ得ズ他ノ広濶ナル場所ヲ撰ビ一拝シテ富山ニ其失敬ヲ謝シ優然臀ヲ攝ケテ雲上ニ発砲シタルハ実ニ無上ノ爽快ナリキ顧ミテ自カラ謂ラク八百万神ノ中其不潔富嶽ニ超ユルモノ少ナカラン方サニ雪隠神ト相伯仲スベシト「凡ソ富岳ハ日中雲ナキヲ稀レニシテ毎旦暫ラク晴レ渡ルコト多シト故ニ登山スルモノ大抵八合目ニ宿シ翌朝夙トニ山巓ニ至ツテ日出ノ美観ヲ目ス名ケテ御来光ヲ拝ムト云フ
此日ハ終日雲終ニ散セズ中腹ニ懸ツテ静然動カズ連綿トシテ一望其窮マル所ヲ知ラズ純白雪ノ如ク又綿絮ヲ舗クガ如シ其光景将サニ是雪旦屋上ニ上ツテ平原ヲ望ムガ如ク駒ヶ嶽八ヶ嶽及遠ク浅間岳ノ諸山ハ僅カニ其頂キヲ表ハシ宛然畝畎ノ如シ高低蜿蜒謐トシテ動カズ暫ク之ヲ諦視スルトキハ当サニ躍ツテ雲上ヲ馳走セントスルノ念ヲ生ズ思フ人間尚ホ此下ニアルカト日暮大陽嶽ノ西方ニ入ル嶽影横サマニ雲上ニ映シ形屋梁ノ如ク漸ク没スレバ影漸ク長ク須臾ニシテ十数里ノ遠キニ達シ其極終ニ天涯ニ映メ遠ク一峰ヲ生ゼルガ如ク実ニ奇観ナリ光景亦以テ雲暮ニ異ナルコトナシ伊豆海ノ燈台近ク南方ニ輝ク思フ唯此光景富岳ニ非ザレバ目撃スベカラズ尓来雲旦雪夕以テ登嶽ノ時ヲ回想スベシト
二十三日　四時起床五時発程朝東天雲未ダ散セズ攀登十五分ニシテ九合ニ達ス同時ニ旭日東天ニ登リ横サマニ雲上ヲ照ラス又以テ雪ノ旦タニ比ス可シ可ナリ壮観ナリ居合ス道者ハ皆日ニ向ヒ合掌シ六根清浄ナリト訴フ知ラズ果シテ清浄ナリヤ否ヤ（恐ラグバ富岳ノ面ヲ穢シタルノ覚ヘアラン）之ヨリ頂上ニ達シタルハ五時三十八分ナリキ至レバ即チ石室ノ茶亭簷ヲ并ベテ立ツ四方ヨリ攀登セル者悉ク此ニ萃マリ談笑ノ声鈴音ニ和シ往来雑沓別ニ之レ一天地ヲナス衆皆茶亭ニ入テ休止ス茶亭甘酒ヲ鬻グ号シテ三国一ノ名物ト云フ試ミニ之ヲ吸フ毫モ美味アルコトナシ価ヲ問ヘハ則チ曰ク一銭六厘ナリト此ニ於テ乎始メテ知ル三国一ノ高価物ナルコトヲ又牡丹餅アリ美味ナラザレトモ空腹ヲ医スルニ足ル此日一同ヘ七箇ヅヽ賜ハリタリ噴火口ハ山巓ノ中央ニアリ稍南北ニ狭リ東西ニ長シ中央部ハ南北ニ向テ埋没シ宛カモ二坑ニ分カル東方ノ坑最大ニシテ深四五丈周四半里ニ近カルベシ恰カモ浅間ノ火口ニ伯仲セリ側壁及底面ニハ点々白雪ヲ存ス西方ノ坑辺ニ当リ焼石ノ中ヨリ清水ヲ湧出スル所アリ名ケテ銀明水ト云フ小屋を構ヘテ之ヲ守護ス道者皆乞フテ壜ニ入レ之ヲ携フ聞ク此水ヲ目ニ注グトキハ忽チ癒ユト知ラズ富嶽ハ何レノ年ニカ眼科ヲ修業シタル（是ヨリ先キ吉田ニ宿スルヤ亭主一ノ小ナル御供ナヒヲ携ヘ生等ニ与ヘ語テ曰ク頂上ニ銀明水及金明水ノ二泉アリ得テ以テ此餅ヲ浸シ携ヘ帰テ眼病患者ニ与フレバ効アリト而レニ生等ハ八合目ニ至リ餓テ之ヲ食ヘ終ヘリ以為ラク頂上ニ至リ逐テ彼水ヲ飲マバ理何ゾ異ナルナケント）
全噴火口ノ周囲凡ソ一里余モアルベク皆崎嶇トシテ危厳堆積シ別ニ之レ一大山脈ヲ形成ス其中八峰アリ最モ険且高キモノハ剣ヶ峯ニシテ茶亭ヨリ高キコト五百尺ナリ次ニ高キモノハ地獄ヶ嶽ニシテ峻険ナルモノハ釈迦ノ割石ト称スルモノナリ割石ハ火口ノ西辺ニアリテ之ヨリ直チニ甲信駿等ノ諸山ヲ目下ニ督視シ遠クハ両野及越路ノ諸山雲霞ノ間ニ出没シ粉黛珍瓏タリ富士ノ八湖モ亦脚下ニアリテ其中

最大ナルモノヲ川中湖トシ岳ノ東南ニアリ水面鏡ノ如ク頭ヲ伸ブレバ将ニ其面ヲ映ゼントス甲府ハ岳ノ殆ンド北北東ニアリ八ッヶ嶽及駒ヶ嶽地蔵嶽等之ヲ囲繞シ近ク脚下ニ愧伏ス剣ヶ峯ハ火口ノ西北ニアリテ之ヨリ西ヲ望メバ駿相及伊豆ノ諸国点々指示スベク富士川ノ一帯眼下ニ流レ宛カモ白布ヲ引ケルカ如シ更ニ目ヲ転ジテ東南ヲ望メバ滄海渺茫トシテ房總及常武ノ諸州雲霞ノ間ニ穏見ス宝永山ハ其脚下ニアリ俯シテ之ヲ臨メバ一小瘤ノ俯伏スルヲ見ルノミ嗚呼此絶風景ヲシテ近ク東都ノ地方ニアラシメバ其勝果シテ如何ゾヤ嶽ヲ登ルモノハ初メヨリ常ニ唯山岳雲霞ノミヲ目スルヲ以テ其観已ニ眼目ニ慣レ已ニ頂上ニ至テ百十三州ヲ睨スト雖トモ著ルシキ注意ヲ喚起スルコトナシ内院ノ入口ハ西南方ニアリ此辺菓子鶏卵又ハ牡丹餅等ヲ鬻ケモノ点々相見ル金明水モ亦此辺二アリ地蔵嶽ハ火口ノ東南方



富士岳ノ高サ及気象表（桜井教諭ノ報告）

高サ			
吉田駅	三千 尺（ヒート）	中ノ茶屋	三千七百五十尺
馬返シ	四千七百五十尺	壱合目	五千尺
二合目	五千六百四十尺	二合目半	五千七百三十尺
三合目	五千三百六十尺	四合目	六千四百五十尺
四合目半	六千五百九十尺	五合目	七千三百尺
六合目	七千九百九十尺	六合半	八千九百尺
七合目	三千六百五十尺	七合目半	一万〇六百尺
八合目	一万〇九百五十尺	九合目	一万一千六百二十尺

頂上（石室）	万ママ二千尺	礼拝場	一万二千一百尺
地蔵嶽	一万二千四百尺	剣ヶ峯	一万二千五百尺
須走駅	二千九百五十尺	御殿場	千八百尺
長尾峠	三千六百尺	箱根駅	二千七百尺

富士内院即チ噴火口ノ深　五十一尺

底面積　東西六十歩　南北九十九歩　周囲三百六十歩

富士山気象

最高温度　六十三度　　最低温度　四十一度

最高気圧　四百九十三，三ミリメートル　　最低気圧　四百九十一，九ミリメートル

平均風力　四，九二英里　　風ノ方向　西北多シ

ニ屹立シ其西麓ニ賽ノ河原ト呼ヘル所アリ道者皆石ヲ集メテ之ヲ積ム宛カモ焼ヶ原ニ団子ヲ立テタルカ如シ其故ヲ問ヘバ答テ曰ク死シタル幼児ノ罪滅シナリト夫レ賽ノ河原三途ノ川等ハ冥土ト唱フル地下ニアリトハ余ガ幼時父母ヨリ聞ケル所ナルガ図ラザリキ高ク九天ノ上ニアラントハ此日ハ如何ナル故カ鬼ハ一匹ダモ見受ケザリキ礼拝場，地蔵岳ノ北麓ニアリ火口ニ向テ赤キ鳥居ノ立テルノミ道者ノ此山ニ登ルモノ此エ到レバ坑内ニ向テ又六根清浄ヲ訴フ此日婦人ノ礼拝スルモノ数名ヲ見受ケタリ

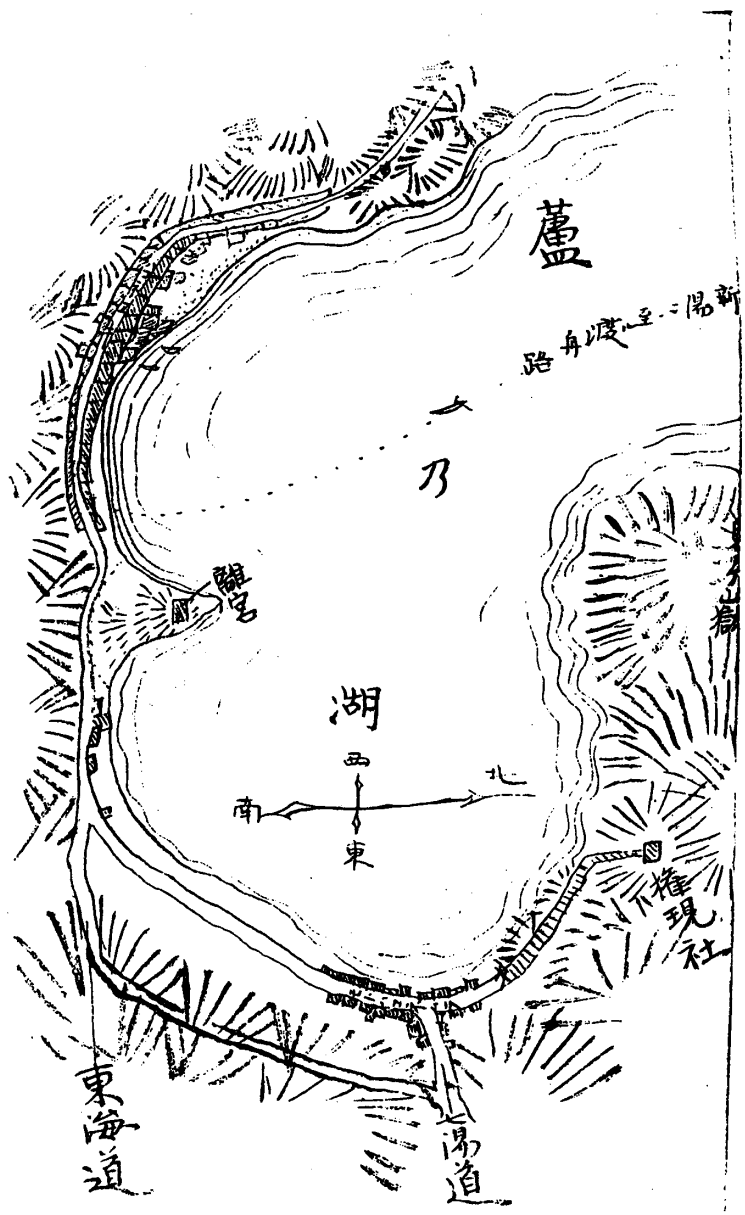
衆已ニ火口ヲ一周シ帰テ石室ノ茶亭ニ到リシハ已ニ十時頃ニシテ之ヨリ降岳ノ用意ヲナス十時五分発程シテ走リ口ニ就ク傾斜倒扇ノ如ク砂礫踵ヲ没ス一蹶スレバ足砂礫ト共ニ落下シ一歩八九尺ヲ走ル歩々漸々落下ノ勢ヲ加ヒ迅風疾電閃々トシテ風雲ニ跨リ止マラント欲シテ止マルベカラズ須臾ニシテ八合目ニ至ル乃チ昨夜ノ宿所ニ到リ備サニ結束シ再ビ途ニ就ク登山口ハ左ニアリ走リハ斜ニ右ニ下ル蓋シ降下スルトキハ走リノ捷ニシテ且ツ又労少ナキニ如カザルナリ八合目ヨリ以下ハ礫塊漸ク細微ヲ加ヘ落下頗ル便ナリ然レトモ間々岩石ノ道ニ横ハルアリテ動モスレバ勢ニ乗シテ衝突シ足ヲ傷クノ患アラントス特ニ身体愈々労ヲ加フルニ方ツテハ行進ノ勢俄カニ止ムベカラズシテ其将サニ止ラントスルノ点ヨリ十数間ノ距離ニ於テ早ク已ニ金剛杖ヲ以テ支ヘザルベカラズ此日風少シク起リ衆人ノ疾走スル所紅塵千丈之ニ随ガヒ目眩シ気窒シテ甚タ之ニ困シム然レトモ奔雷馳電ノ快又以テ之ヲ償フニ足ル須臾ニシテ六合目ニ至ル（走リ口ノ六合目ナレバ登山口トハ異ナリ走リ道ニハ八合以下壱合目ニ至ル迄唯此家アルノミ）茶亭一アリ就テ少時ノ休ヲ取ル八合ヨリ此処ニ至ル迄時数ハ三十分ヲ出デザルベシト雖トモ履ハ已ニ二足ヲ失ナフ通路砂礫ト言フト雖トモ其実皆一握前後ノ焼石ニシテ宛然土蔵ノ焼ヶ跡ヲ踏ムガ如シ奔馳ノ勢強ク之ヲ踏破スルヲ以テ履ノ破ルヽコト剪刀ヲ以テ截ルニ異ナラズ頂上ヨリ麓ニ至ル迄旅人ノ棄却セル履連綿トシテ相継グ

休憩少時走ツテ又降路ニ就ク此時ニ方ツテヤ奔馳已ニ久シク常ニ劇シク脊椎ヲ震盪シ之ヲ脳髄ニ達スルヲ以テ頭痛頓ニ生シ耳亦塞ガリ人語ヲ解ゼズ爰ニ至テ始メテ行歩ニ難ム然レトモ贏足能ク奔馳ノ勢ヲ支フル能ハズ鼻ヲ曲ゲ額ヲ蹙リ痛ヲ忍ンデ走リ下レル杖ハ宛カモ赤鬼ニ鞭撻セラレテ針ノ山ニ登ル死人ノ如クナル可シ然レトモ瞬時ニシテ早ク已ニ壱合目ニ達ス時辰堂十一時四十分ナリ始メ頂上ヲ発セシヨリ此ニ至ル迄僅カニ一時半ニ過ギス之ヲ登岳ノ際ニ比スレバ遅速ノ差如何ゾヤ富貴高位ニ達ス

ルノ難フシテ卑賤ニ陥ルノ早キ又以テ知ルベキナリ
休憩既ニ久シ或ハ茶ヲ喫スルモノアリ或ハ水ヲ飲ムモノアリ素麺ヲ食スルモノ牡丹餅ヲ顴〻張ルモノ意モベツニ其好ム所ノモノヲ飲食シ疲労漸ク減ス即チ辞シテ途ニ上ル之ヨリ以下樹林叢樹欝トシテ往路ヲ蔽ヒ単ニ森林中ニ跋渉〻スルノ思ヲナス之ヨリ馬帰シニ着シタルハ午後三十分〻〻ニシテ壱合ヨリ此ニ至ルノ里数一里ヲ出ズルコト遠カラザルベシト雖トモ只草林ノ間ヲ彷徨シテ毫モ耳目ヲ楽マシムルモノナク只管疲羸ノ身ニ切ナルヲ感シ長遠千里ノ思ヒアリタリ馬返ニ着スレバ少シク人家ガマシキ一茶亭アリ此ニ又一大休憩ヲ行フ以南ハ静岡県管轄ニシテ即チ甲駿ノ境界ナリ之ヨリ須走リ駅ニ着シタルハ三時十分ニシテ馬返シヨリ道程三里四里其間ハ茫々タル荒野樹林ナリ須走リ駅ハ吉田ニ比スレバ一歩ヲ譲ルベキモ此ル山間ニハ先ヅ先ヅ恕スベキ一小市ナリ人家百四五十モアリ其中五六分ハ旅舎ナリ旅人宿舎ニ着ケバ少女数名各箱ヲ肩ニシ此処彼処ノ旅舎ニ至リ客ニ請フテ御山祝エニ餅ヲ買ハシム是亦一好手段ナランカ
廿四日　四時起床　五時出発　七時三十分御殿場ニ着シ藤屋旅店ニテ休憩ス市街ハ余マリ繁華ニアラズ先ツ淋シキ方ナリ休憩暫時長尾峠ニ向ツテ発ス
長尾嶺ハ箱根ノ北ニ聳ユル高峯ニシテ全山唯芝草ノミ頂上ニ至レバ蘆荻欝生道ヲ没シ面ヲ払ヒ頭ヲ打ツ此日炎熱殊ニ甚タシ途上一樹蔭ノ息フベキ所ナク一滴水ノ飲ムベキモノナク日光輝々トシテ斜メニ耳辺ヲ射リ草木風無クシテ謐然動カズ蒸々トシテ烙気足辺ニ起リ淋漓トシテ汗躯幹ヲ浸タス疲憊切ニ迫リ汗滴鼻頭ニ滴タレトモ之ヲ拭フノ力ナシ渇極ツテ倒レテ草露ヲ吸ヒ炎熱耐ヘ難クシテ顔ヲ蘆荻ノ間ニ潜ム誠ヤ三千世界ノ苦痛ヲ集ムルトモ之レニ過クルモノアリト覚ヘズ如何ナル前世ノ悪業ヤラナドテ斯ル憂キ目ニハ逢フラン身アツテ此苦アリト思ヒバ命モ身ヲモ惜マバコソ仰イテ哀ヲ昊天ニ訴タヒ伏シテ恨ミヲ地神ニ陳ブ一百余人ノ同行疲苦煩悶蹌踉トシテ歩ヲ進ムル能ハズ記シテ此ニ至レバ悚然身ニ粟粒ヲ生ズルヲ覚ユ已ニシテ漸ク山巓ニ近グ樹蔭漸ク密ニシテ始メテ蘇生ノ思ヲナス唯渇之レ甚シ路傍一潴潦アルヲ見ル先キナルモノ之ヲ見テ喜ビ走テ満把之ヲ呑ム水既ニ溷泥シテ赤濁血ノ如シ心ニ汙濊ヲ感ズレトモ耐ユル能ハズ乃チ水ヲ濁シテ後人ヲ悩マサンコトヲ恐レ匍匐シテ口ヅカラ之ヲ吸フ一呼鯨飲餓児ノ乳房ヲ得タルカ如ク赤濁汚穢顧ミルニ遑アラズ飲ミ終テ漸ク快カラザルヲ覚ユ然カレトモ思フ我百余人ノ生命ハ全ク此濁水ノ賜モノナリト衆此ニ至ツテ一休ヲ携フ所ノ行厨ヲ喫ス是ヨリ勢力余リ旧ニ復シ須臾ニ下テ山腹平濶ノ地ニ出ズ目ヲ放ツテ前方ヲ見レバ蘆湖脚下ニアリ箱根足柄ノ諸嶺其周囲ヲ巡リ靄然トシテ青黛ヲ吐ク誠ニ好風景ナリ一休ノ後直下シテ草原ニ出ズ之ヨリ湖辺ニ至ルマデ直径一里計カリ延褒左右ニ長シ名ケテ千石原ト云フ牧場アリ牛馬各々三百頭渋沢栄一氏ノ設クル所ニシテ箱根七湯ノ浴客ニ供スル牛乳ハ皆此所ヨリ出ヅト云フ是ヨリ此草野ヲ横ギリ十二時三十分頃湖辺ニ達シ元箱根村青木又次郎方ニ休憩シ或ハ茶ヲ喫シ或ハ菓子ヲ食ヒ以テ衆勢ノ来リ集マルヲ俟ツ此家温泉アリ近時発見セル所ト見ヘ名ケテ新湯ト云ヒ家屋モ尚新タナリキ湯ハ硫黄泉ナリ此家ハ又之ヨリ箱根駅ニ達スル湖水渡舩ノ艤場タリ休憩漸久シク衆全ク整フ乃チ舩ニ上ツテ湖水ヲ渡ル水深フシテ藍ノ如シ両岸ノ山嶺凡テ芝山ニシテ風景佳絶ナリ三時三十分箱根駅ニ着ス此水路一里半之ヨリ直チニ石内屋ニ投宿ス」箱根駅ハ神奈〻県下足柄下郡ニ属シ連山四境ヲ廻ラシ蘆ノ湖ノ両岸ニ臨ミ駒ヶ嶽其東方ニ聳ユ戸数ハ大凡百四五十戸アリ萱葺及板葺ノ家全市街ノ九分余ヲ占ム旅舎ハはふやヲ

以テ最トス蘆ノ湖ノ縁ニアリテ山水ノ景悉ク掬ス可シ余ハ皆数フベキノ旅舎ナシ商売殊ニ衰微シテ街衢寂寞タリ外国人ノ来テ暑ヲ避クルモノ多ク朝暮市中ヲ彷徨スルモノ多シ物価ハ一般ニ不廉ニシテ且食物ニ乏シ

駅ノ東端ニハ昔日ノ関門ノ痕跡アリ只路傍ニ二三尺ノ石垣頽敗シテ存スルヲ見ルノミ之ヨリ少シク東北ニ方ツテ陸地ノ湖中ニ突出スルコト二町計カリ地形丘陵ヲナス離宮其頂キニアリ街道ニ沿フテ門檣ヲ設ケ下ヨリ之ヲ望メバ磴道蜿蜒宮闕其上ニ聳ユ甚タ壮麗ナラズト雖トモ最モ好位置ヲ占メタルカ如シ明治十八年ノ建築ナリト云フ之ヨリ更ニ東ニ向テ街道ヲ進メバ人家四五十戸相駢列シテ寂寞タル一部落ヲナス之ヲ元箱根村トス更ニ湖辺ニ沿フテ左リスレバ一帯ノ磴道岡陵ニ導ク之即チ名ニシアウ箱根ノ権現社ニシテ老杉鬱蒼トシテ道ヲ蔽ウ静ニ磴道ヲ登ル一町計リニシテ屈曲シ右ニ折ル之ヨリ十数弓ノ間石階稍急ナリ登リ終レバ即チ社殿ニシテ社方十間計リ高丈余門檣皆塗ルニ鉄丹（ベニガラ）ヲ以テス社中開放シテ自由ニ出入スベシ



数畳ノ席内ニ舗リ入テ之ニ憩フ古代ノ額周壁ニ充ツ而レトモ別ニ注意ヲ惹起スルモノナシ灑掃ハ行キ届キ居レトモ一人ノ護衛者アルニ非ザレバ門檣周壁落筆ヲ以テ填充ス古代ノ状況ハ得テ推知セズト雖トモ今ヨリ之レヲ見レバ寒村ノ一鎮守社ニ過クルコトナシ地位後ニ高陵ヲ負ヒ社ハ其中腹ニアリ庭地方三十間計リ樹木四周ニ茂ゲリ蒼々トシテ昼尚ホ暗シ

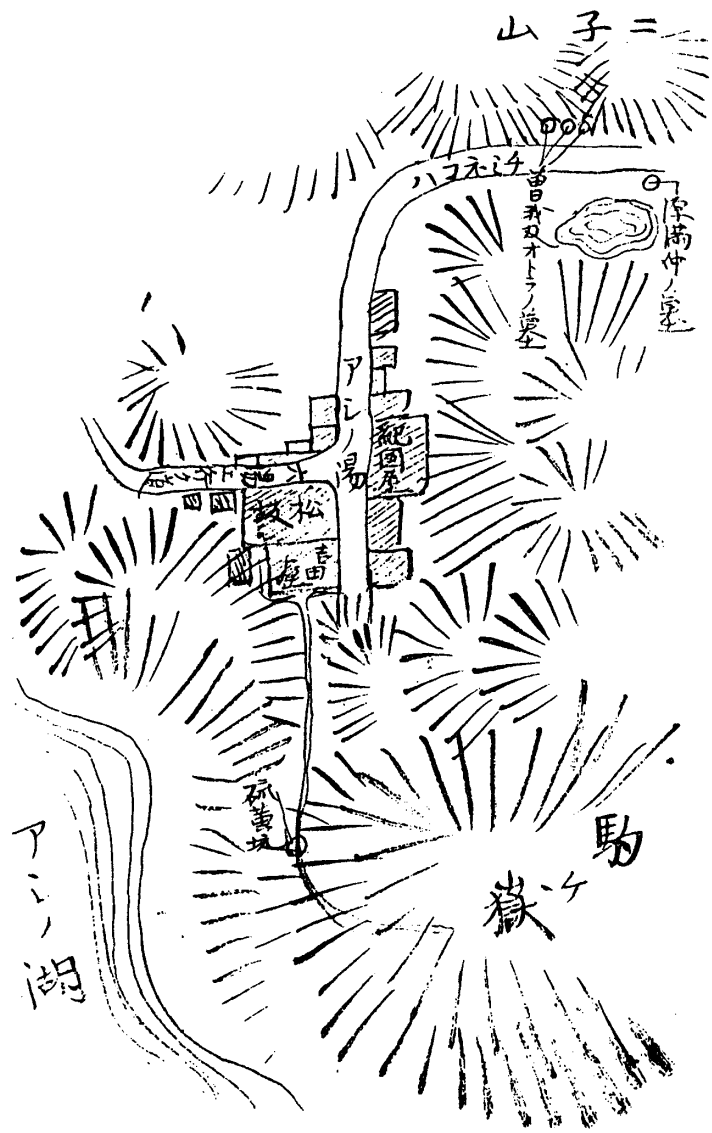
廿五日　滞在　此日休業　終日昼寝トとらんぷトニテ暮セリ此日宛カモ該駅ノ祭礼ニシテ跳リ屋台ヲ出シ絲笛太鼓ノ音囂ビシク雑沓半夜ニ至ル

廿六日　滞在　此日西教諭ニ従カヒ駒ヶ嶽ニ登ズ朝来天穏カナラズ半腹ニ至レバ雲雨閉塞シテ寒気頓ニ強シ之ガ為メ登山ノ目的モ已ニ画餅ニ帰セルヲ以テ帰往唯衆ノ意ニ任ズ帰ルモノ幾ント半ス余衆勇ヲ鼓シ雨ヲ侵シテ登ル傾斜甚シ攀登頗ル難ナルヲ覚ユ須臾ニシテ頂上ニ達ス中央ニ一

坑アリ周囲百歩計リ形幾ンド圓シ深サハ二三尺ニ過キズ中ハ只焼石粒ニシテ一草ヲ生セズ西教諭曰ク蓋シ噴火口ノ痕跡カト

駒ヶ岳ハ近傍ノ最モ高峻ナルモノニテ海面ヲ貫クコト四千〇八十尺アリ若シ晴天白日ナリセバ其眺望頗ル優美ナリト云フ惜ムラク此日雲霧四モニ塞ガリ十歩ノ外ヲ見ルコト能ハズ皆以テ憾トナス既ニシテ帰路ニ就キ蘆ノ湯ニ向ツテ下ル峻険更ニ甚シ幾ンド四十五度ニ達スル所アリ茅蘆又茂生シテ行人ヲ埋没ス降下数町硫黄俄カニ来テ鼻ヲ突ク須臾ニシテ硫黄坑場ニ到ル地方二十四間計カリ硫黄一面粘土ニ交ツテ地ニ舗キ温泉及亜硫酸瓦斯等諸所ニ噴出シ地盤一面ニ熱ツシ明礬硝土等少量ヅヽ散布セルヲ見ル

之ヨリ十四五町ヲ下レバ蘆ノ湯ナリ先キニ駒ヶ嶽ヨリ半途ニシテ帰レルモノ已ニ来ツテ吉田屋ノ樓上ニアリ我衆亦此ニ入ル此地ハ四周皆高嶺ニシテ眺望ニ乏シ温泉宿数戸アリ吉田屋紀ノ国屋松坂屋等ヲ宜シトス湯ハ硫黄泉ニシテ臭気甚ダシ須臾ニシテ帰ル」



二子山ハ此地ノ北ニ聳ヒ其麓ニ曽我兄弟及大磯ノ虎ノ墓碑アリ源満仲ノ墳墓亦其道傍ニアリ蘚苔面ヲ埋メテ一文字ヲ弁ゼズ只雑草ノ間ニ粗糙ナル石塊ノ重ナレルヲ見ルノミ蟋蟀近ハラニ鳴ク

廿七日　滞在　岩川教諭ニ従ヒ生物採集午後湖水ニテ遊泳ス

廿八日　雨天ニ付休業

廿九日　滞在　岩川教諭ニ従カヒ生物ヲ採集ス駅ノ南方一里計カリ山間ニ一小沢アリ水甚タ浅クシテ岩石多ク散布ス一老翁アリ笊ヲ腰ニシテ山椒魚ヲ捕フ其方水ノ一部分ヲ岩石ニテ決シ水ヲシテ流ル、コトナカラシメ而ル後彼此ニ散在スル岩石ヲ除カニ擡グ山椒魚其下ニアリ翁双手ヲ開キ除カニ魚ノ下ニ送リ魚轍ニ掌中ニ入ル少時十数疋ヲ捕フ予見テ之ヲ快トシテ自カラ石ヲ上テ魚ヲ求メ除カニ手ヲ運ブ忽チ泳テ岩下ニ隠ル再タヒ之ヲ求ムルニ又逃ル怒テ激スレバ水溌シテ姿ヲ失ナフ此ニ於テカ始メ

テ熟練ヲ要スルコトヲ知ル後日岩川教諭生徒十名計ヲ伴ナヘ之ヲ捕フ数十尾ヲ得タリ

三十日　雨天休業

三十一日　午前曇天　午後生物採集雨ニ逢フテ帰ル

一日　雨天休業

二日　四時起床　五時発程　七湯ヲ巡廻スルノ目的ヲ以テ先ヅ蘆ノ湯ニ至リ暫時休憩シ之ヨリ一里余ニシテ小涌谷ヲ過ク温泉場ニシテ可ナリノ温泉宿ヲ見受ケタリ但近時新タニ開キタルモノヽ如シ之ヨリ二里計カリニシテ底倉村ニ至リ梅屋方ニ止宿ス底倉ニハ温泉宿数戸アレトモ梅屋ヲ以テ最トス此家温泉二ヶ所アリ一方ニ湯滝ヲ設ク此地ハ前面ニ岡陵アリテ谿流其下ヲ奔流シ風光明媚ナリ此谿流ニ沿フテ上ル一町余ニシテ瀑布アリ高丈余傍ラニ温泉源アリテ蒸気常ニ発散ス竹管此ヨリ懸リ延テ温泉場ニ導ク

宮ノ下ハ底倉ト相連接シ梅屋ヲ距ル一二町ニ過ギズ此地ハ底倉村ノ一地名ナレトモ人皆之ヲ別視セルモノヽ如シ温泉宿ハ奈良屋及藤屋ヲ最トス街道ヨリ遠ク望メバ白亜皚々岡陵ノ上ニ屹立シテ頗ル壮麗ナリ藤屋ハ家屋皆洋風ニシテ客モ亦殆ト全ク外国人ナリ奈良屋ハ和洋両風ニシテ表面ノ家ヲ和風ニシテ日本ノ浴客ニ供ナヒ後ロヲ洋風トシテ洋人ニ供フ

凡ソ区内ノ繁華ナル且人家ノ多クシテ壮麗ナルモノアルハ七湯中此所ヲ以テ最トス事実荒物唐物等ヲ鬻ク家屋所々ニ散見シ電信局アリ郵便局アリ医士診断所モ見受ケタリ是等ハ他ノ六湯ニ見サル所ナリ又木地細工場アリ之ヲ鬻ク家頗ル多シ之レ箱根有名ノ産物ナリトス

木賀ハ底倉ヲ去ルコト十数町ニシテ遥カニ底倉ト相対シ幽邃ナル一区域タリ温泉宿十数戸アリ神代樓ノ外観最モヨロシ渓流一水此地ノ中央ヲ貫流ス四周皆高峻ナル岡陵ナリ

堂ヶ島ハ宮ノ下ノ麓数町ノ所ニアリ周囲皆高峻ナル岡陵屹立シテ更ニ清風ノ来リ〻〻コトアリトモ思ハレズ地区方一町ニ過キズ宛然摺鉢ノ底ニアルガ如ク温泉宿細大十数戸アレトモ何トナク不潔ナル様ニ覚ユ世ノ箱根ニ遊バントスルモノ設令ヒ木賀若クハ蘆ノ湯ニ至ルモ堂ヶ島ニ至ル可カラズ

三日　午後一時出発ス行程一里余ニシテ塔ノ沢ニ至ル渓流アリ地ノ中央ヲ貫流ス美麗ナル温泉宿数戸アリ其中玉の湯ヲ以テ以テ清潔閑雅ナル家トス実ニ明媚ナル一佳境ナリ之ヨリ十数町ニシテ湯本ニ至ル渓流ニ沿フテ数戸ノ家屋相駢列ス有名ナル温泉宿福住ハ随分立派ナリ

湯下ヲ去ル二三町ニシテ三枚橋ト呼ベル橋アリ之ヨリ東海道ト合シテ一道路トナル底倉ヨリ此ニ至ル迄道路平坦広潤ニシテ車馬ノ往復自在ナリ七湯ノ繁盛以テ推知スベシ四時小田原ニ至ツテ宿ス

小田原ハ内海ノ浜ニアリテ人家千余戸アルベシト雖トモ市街寂寞人家モ壮麗ナラズ頗ル衰退ノ現象ヲ呈セリ

四日　三時起床　四時出発　六時十分酒匂川ヲ過グ此所ハ水流ノ海ニ注グ所ニシテ最モ其広サヲ極メ橋ノ長サ二百間余モアルベシ六時三十分国府津ニ着シ七時発ノ汽車ニ駕シ大磯七時三十分平塚七時四十五分藤沢八時十分戸塚八時三十分ノ停車場ヲ過キ之ヨリ六七分時ニシテ隧道ニ至ル通過スルノ時間凡四十秒計リ深黒ニシテ黒白ヲ弁ゼザルモノ暫時ナリ之ヨリ程ヶ谷八時五十分横浜九時（乗替）神奈川九時十分品川九時四十分新橋九時五十分等ヲ経テ十一時頃帰校セリ

東海道二面ノ新道
堂嶋
宮城野
水賀
宮ノ下
底倉
道路
溪流
洋風家屋
和風家屋

On the Document of the First Scientific Excursion in Japan — Kin-nosuke Hirasawa "六州游記 Rokushu-Yuuki", a diary written by one student of Higher Normal School —

Yasuaki Shin'ya

We know first scientific excursion in Japan was begun from Higher Normal School in Tokyo, in the summer of 1887. But no one have known the details of this scientific excursion. Arinori Mori, the first Minister of Education in Japan, planned about training of teachers in new Meiji Japan. He thought character of good teachers for the Imperial Japan is like a soldier. In order to this policy, Mori arranged all of school life in normal schools to military style. Normal schools adopted military training and military march for long days instead of physical exercises.

Hideo Takamine, Principal of Tokyo Normal School in those days, disliked Mori's policy, militalism in education. He would add academic research to military march and call this march "修学旅行scientific excursion" from this time.

I found a diary written by a student who particiated in this first scientific excursion in Hirasawas' documents (Mr. Tatsuyo Hirasawa owns). That student is Mr.Kin-nosuke Hirasawa, who became a principal of middle school later. He wrote a diary during this excursion, named "六州游記 Rokushu-Yuuki". This excursion was operated from August 6 to September 4. About one month was spent on this excursion.

I will introduce this diary. This diary shows us the details of this excursion. Based on these documents,we can discuss about the culture of schools and teachers in modern Japan.